

『色道四十八手 たからぶね』

2014年10月4日公開

製作…PGぴんくりんく

配給…PGぴんくりんく

スタッフ

監督…井川耕一郎

原案・企画…渡辺護

脚本…井川耕一郎

撮影…清水正二

照明…清水正二

主題歌…結城リナ

録音…シネキャビン

編集…酒井正次

特殊造形…新谷尚之

助監督…佐藤吏

製作…太田耕耘キ、林田義行

現像…東映ラボ・テック

配役

千春…愛田奈々

一夫…岡田智宏

敏子…佐々木麻由子

健次…なかつせいじ

雀…ほたる

久生…野村貴浩

あらすじ

結婚一年目の夫婦、一夫と千春はまだまだ初々しさが残る新婚生活を送っていた。特に性的なことに不慣れな千春は、夜の営みではいつも恥ずかしそうにしている。ある晩、一夫は、千春が微笑みながら「たからぶね…」と寝言を発しているのを耳にし、それが頭から離れなくなる。そんな折、一夫は叔父の健次から「性の四十八手」を取めた写真集を譲り受ける。好奇心に掻き立てられながらページをめくるうち、一夫は偶然にも「宝船」という体位の存在を知ることとなる。やがて、一夫は叔母の敏子から千春の秘密を聞かされる。なんと千春は、一夫と出会う以前の五年前から健次の不倫相手だったのである。復讐に燃える一夫と敏子は、とある計画を立てる…。

解説

ピンク映画50周年を記念して企画された作品。ピンク映画黎明期から活躍した映画監督である渡辺護の原案で製作される予定であったが、渡辺が2013年に急逝したために、脚本の井川耕一郎が代役で監督を務めた。ドイツ開催の日本映画祭、ニッポン・コネクションで審査員特別賞を受賞するなど、国内外問わず高い評価を受けた。「人生は、遠くから見れば喜劇一」というキャッチ・フレーズが示すように、コミカルな台詞回しなど喜劇的演出が多く見られる一方で、全体的には冷めきった夫婦の倦怠感や、どことなく死の雰囲気が漂っている。本作の見どころはなんといっても、四十八手の中から「宝船」を選択したことにあるだろう。女性が男性の上に乗りながら、その脚を伸ばして帆柱に見立てることで七福神の宝船を模す印象的なビジュアルは、家庭の幸福を示すとともに、中盤以降、女性上位に反転する物語の展開を象徴づけるものになっている。また、神々しくさえあるその見た目とは裏腹に、男性の足が攣るのではないかという不安が常に観客の頭をよぎる。一見すると理想的な夫婦生活の、裏側にある折り合いの悪さ、ごちなさ、この珍妙な体位と重なって私たちの身体へと伝わってくる。

参考資料

「Takarabune Official Website」、PG-WEB-SITE、<https://pg-pinkfilm.com/takarabune-movie/index.html>（2026年10月7日最終閲覧）

（執筆：川原琉暉）